広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　291－297

日本語学習者が「日本文化」を体得するためのカリキュラム試案

住田　環

(2004年9月30日受理)

Program guide proposal for foreign students to support adaptation to Japanese culture.

Tamaki Sumida

Students studying at Japanese language schools in Japan do not have enough time available to improve their verbal communication ability using the present curriculum. This is overwhelming for them due to the fact of their extensive cramming for the entrance exams forth coming.

The most important resource for students living in Japan is their communication skills and the ability to adjust to their new environment here in Japan. The curriculum should reflect this and should be one that supports the adaptation to Japanese culture with the consideration of their homeland in mind.

Key words : communication skills, curriculum, Japanese culture, learning Japanese as a second language, adaptation to Japanese culture

キーワード：言語運用能力，カリキュラム，日本文化，第二言語としての日本語，異文化体得

1．はじめに

平成14年度から留学生の入学選考方法が変わり，日本の大学への進学希望者に対して「日本留学試験」が実施されている。この試験の中の科目「日本語」では，大学等の高等教育機関での勉学や研究活動に必要な“アカデミック・ジャパニーズ”を測定することが主な目的になっており，受験者の日本語の知識を直接問うのではなく，問題解決能力，言語運用能力が問えるような問題作成が行われている。本稿は，留学生入学選考方法の変更に伴い，日本国内の日本語学校をはじめとする大学進学予備教育を行っている日本語教育機関の，従来のカリキュラムに代わる新しいカリキュラムの提案を試みるものである。尚，筆者は'94年より８年間，民間の日本語学校で就学生を対象に日本語を教えた経験があり，そこでの実情に基づくところが大きい。

2．従来のカリキュラムの問題点

「日本留学試験」実施以前の留学生選考において，受験者の日本語能力を測る手段として最も多く採用されていたのは「日本語能力試験」である。大学によっては現在でも，選考に際して，この日本語能力試験を利用しているところがあるようだ。特にこの試験の１級合格が，大学入学の可否を決定する場合もあり，大学進学希望者にとっては，１級に合格することが日本語を学習する上での最大の目標といっても過言ではない。従って，受験者の日本語指導を行っている教育機関では，日本語能力試験対策を柱にカリキュラムを組まざるを得ないという状況があり，筆者が勤務していた日本語学校でも，全日制の在籍生は，いわゆる受験勉強としての日本語学習を行っていたのが現状であった。

通常来日時の日本語が初級である学生を，ビザの年限の関係上，最長でも２年で日本語能力試験１級合格レベルまで引き上げる教育機関のカリキュラムには，いくつかの問題点がある。どこの教育機関であっても，以下のような問題点は共通して挙げられるだろう。

①限られた学習時間と，日本語能力試験１級の認定基準を満たすための学習内容を鑑みたとき，どうして

も暗記中心の詰め込み式学習になってしまうこと。
②その結果，読むことは日本語能力試験１級レベルに達しても，聴くこと，話すことが，読むことと同じレベルで上達しないこと。
また，書く練習をする時間が十分に取れないこと。
③自国を離れて「新しい」体験（「異文化」）に触れるようなプログラムの提供ができていないこと。

3．新しいカリキュラムの理念

「日本留学試験」で測定される“アカデミック・ジャパニーズ”と，２．で述べた日本語教育機関の従来のカリキュラム上の問題点を考えたときに，新しいカリキュラムを提案するに当たって基本に置くべき理念は何だろうか。以下の２点にまとめたい。

①言語運用能力を高めるカリキュラム

自国を離れ，外国語としての日本語を使いながら日本で生活するためには，まず日本語の運用能力が必要とされるだろう。そのためには「使える日本語」を身につけなければならないと考えるが，従来の日本語教育機関のカリキュラムでは，２．の問題点②で述べたように，学生に対して「使える日本語」が提供できていない。漢字が読めたり，難しい語彙を知っていても，聴けない，話せない学習者，すなわち他者とのコミュニケーションがスムーズにとれない学習者は，日本の生活の中で問題にぶつかったときに，それに対処し，解決していくことが難しいことも多いと推測できる。

言語運用能力がアップするということは，問題解決能力がアップすることにつながると考え，言語運用能力を高められるようなカリキュラムでありたい。

②異文化体得の支援

①で述べた言語運用能力があって，日本語を使って自分で問題解決できる学習者でも，自分の国と日本との文化の違いによって生じた問題については，言語で解決できないこともあると思われる。日本という異文化の中でぶつかるであろう様々な疑問，問題に対処し，問題解決をしながら，新たな自分のアイデンティティを創っていく過程を「異文化体得」と捉え（細川，1999），それを支援できるカリキュラムでありたい。

4．「文化」とは何か

学習者が，３．の①で述べた「使える日本語」を学ぶためには，日本の文化を学ぶことがぜひとも必要であろう。なぜなら，海外で日本語を学ぶ場合と違い，日本という社会の中で毎日の生活をする以上，言語と文化を分けて学ぶことは難しいからである。毎日接する日本人との関係は，単に日本語ができるかどうかということではなく，その場その場に適した「言語・文化行動」がとれるかどうかに負うところが大きい。私たち日本語教師が学習者に教えなければいけないのは，日本語の構造的知識だけでなく，日本という社会の中での日本語の使われ方まで含まれており，日本文化の理解の裏付けがあって学習された日本語こそ，コミュミケーションの中で機能することができるものだと考える。その機能できる日本語が「使える日本語」と言えるだろう。

このように見てくると，新しいカリキュラムを考える際に，３．の①，②のいずれの理念においても，授業の中に日本文化をどう取り入れていくか，ということが大きな柱になることが明らかになってくる。

4－1．「文化」の定義

まず，「文化」の概念から考えてみることにする。「文化」という言葉は，広い範囲，領域で用いられるため，その概念を単純化，一般化するのは難しいが，日本語を教える際の「日本文化」を考えていくための「文化」概念として，「文化は人間の生活環境そのものである。文化は人間生活のあらゆる面に影響を及ぼし，変えていく。文化は人格であり，様々な表現方法の仕方であり，考え方であり，行動の様式であり，問題の解決方法であり，政治組織の運営方法なのである。しかし，あまりにも当然のこととして受けとめられているため，ほとんど問題にされていない側面が文化にはある。しかし，それが深いところで，知らぬ間にわれわれの行動様式に影響をおよぼしているのである。」という，人類学者ホールの見解を参考にしたい。つまり，私たち人間は，ある「文化」環境の中で無意識のうちに生活様式，思考様式，行動様式を形成されており，私たちの行動や反応の仕方を規定していると言える。そして無意識のうちに個人の内部に身につけられた特定の形式を使って，言語あるいは非言語による行動を媒体として他者とのコミュニケーションを図っている。同じ文化背景を持った個人間コミュニケーションの中にあってもやり取りされるメッセージが100％理解されることは難しいのであるから，それが異文化間でのコミュニケーションになった場合，そこには想像以上の壁が存在しているのではないだろうか。

日本で生活している学習者のことを考えると，彼らは我々日本人の発する言語，非言語によるメッセージを見たり聞いたりして，生活の様々な場面で「異文化」に接している。彼らが，日本という，彼らにとっての「異文化」にどう対していくか，その消化の仕方を助けるヒントを与えられるようなカリキュラムであ

ることが望ましい。

4－2．「異文化」のレベル

それでは，何を「異文化」と感じるのであろうか。それを考える第一歩として，文化におけるコミュニケーションのレベルを取り上げてみたい。社会人類学者のリーチによれば，文化におけるコミュニケーションのレベルには3つのレベルがあるとされている。

①「自然」のレベル

人間は物が飛んでくれば本能的によけるし，寒くなれば衣服を着る，お腹がすけばご飯を食べる，といった，人間であればどんな文化を通しても変わらないだろう，というごく自然と呼べる状態。普通の人間が自然に対して起こすような，条件反射的なレベルで理解できるコミュニケーションの段階。

②「社会的」レベル

日本では車は左側通行である，家に入るときには靴を脱ぐ，など，人間が普通に育ってきて得られる常識のレベルで消化できるであろうコミュニケーションの段階。わからないことでも，聞いて教えてもらい，学習すれば理解できるような社会的な習慣や取り決め，といったレベル。

③「象徴的」レベル

社会特有の価値観，行動様式，習慣，信仰など，その意味や価値を共有していないと理解できないコミュニケーションの段階。文化的な中心部であり，社会や国の重要な価値を担っていることが多く，外部の者にとっては理解するのが極めて困難なレベル。

この3つのレベルが総体として文化を形づくり，文化全体の中に様々な要素が組み込まれて人々の言葉と行動に意味づけをしている。異文化を対象に考えると，自分の国とは違う，何か違和感がある，ということを感じるレベルに段階があるということであり，特に「象徴的レベル」に達した場合は異文化レベルが高くなるということで，それに順応して生活していくためには，高い異文化理解，異文化対応が求められるということになる。

日本で日本語を学ぶ学習者にすれば，様々な形で発信される異文化のメッセージをいかに受け取り，理解し，受容するか，が日本で生活していけるかどうかにかかっていると言えるだろう。カリキュラムを考えるにあたり，学習者がどんな時に「違和感」を感じ，どんなことに対して「異文化」を感じているか，を基に，「日本文化」を考えてみたい。

4－3．「異文化」の受け取りから消化まで

さらに，学習者が日本という異文化を理解するとはどういうことなのか，を考えなければならないが，4－2．で述べた異文化のレベルと合わせて考えると，①の自然のレベル，②の社会的レベルであれば，学習者は知識を与えられることによって，あるいは日本での生活の中で自然な形で，日本という異文化を「理解できる」と思われる。つまり，説明を受けることで，自文化との違い等を論理的にわかるであろうと思われる。しかし，③の象徴的レベルになると理解するのは難しく，むしろ学習者の，日本をわかろうとするための努力，あるいは，学習者に日本をわかってもらうための支援が必要であると考える。これは，カリキュラムを考える中で，日本文化をわかってもらうためのしかけを組み込まなければならないということだろう。

長尾（2001）に，「「わかる」ということにはいくつものレベルがあることが想像できるだろう。第一のレベルは，言葉の範囲内で理解することであり，第二のレベルは，文が述べている対象世界との関係で理解することであり，さらには第三のレベルとして，自分の知識と経験，感覚に照らして理解すること（いわゆる身体でわかる）というレベルを設定することが必要であろう。」とある。これを日本語学習者へのカリキュラムの中で考えると，

第一のレベル…基本的な言語学習過程で言葉を理解すること。

第二のレベル…学習言語を実社会の生活の中で使い，体験して理解すること。

第三のレベル…「異文化」を感じ，受けとめて考え，学習した知識とこれまでの経験，感覚によって自分の中で消化すること。異文化を身体でわかること。

という分け方になるのではないだろうか。4－2．で文化のコミュニケーションレベル3つが総体して文化を形作っていることを考えたが，その複合的に形成されている文化の中から様々な形で発信されるメッセージを受けとめ，わかっていくプロセスにも，上記の「わかる」レベル3つが総体されていると考えられる。従って，学習者によって，その「わかる」プロセスは様々であろう。学習者によって自分が持っている文化も様々であるのだから，「異文化」の受けとめ方が異なるのはもちろん，それを「わかる」プロセスも異なるのは当然のことである。

また，日本語を教える日本人教師の側も，日本文化という共通の文化背景を持っていながら，ひとりひとり個性の違った人間であり，そのような教師が，同じように個性を持った，しかも文化背景の異なる学習者を相手に授業を行っていくのであるから，決して画一的なカリキュラムで進めていくことはできない。しかしながら，目指したいのは，上記の第三のレベルの理解（以降は「文化体得」と呼ぶことにする），すなわ

ち，学習者が日本文化という異文化を受け止め，自分の中で消化して日本に適応して生活していけるような支援ができるカリキュラムである。学習者が一様に理解できなくとも，日本文化を受け止め，考えるきっかけを与えられるものでありたい。

5．先行研究

「文化体得」を考えて行くにあたり，ここで先行研究に触れておくことにする。

細川（1999）で「外国人のための『日本事情』とは何か，という問題を出発点として，日本語を第二言語とする人たちのための日本語教育を，ことばのためのことばの教育としてではなく，ことばによる文化の体得の訓練として捉えよう」と提案されている。これは，一般的に「日本事情」という科目名で行われている，日本社会，日本文化の教授の歴史が背景にある。1980年代までの『日本事情』の授業では，「伝統的な日本」や「日本の習慣」が「知識」として教授され，学習者はその「知識」を理解し，その通りに行動することが求められるようなところがあった。いわゆる「同化教育」的な側面を持っていたのが『日本事情』の授業であった。その後，実際のコミュニケーションを通じて社会理解，文化理解を進めていこうという実践がなされるようになったのであるが，その流れをさらに進めた形での「文化体得」の提案である。細川（1999）は，「「文化を学ぶ」ということは，他者の取り出した文化論を知識として理解するということではなく，自らその習慣の内側に分け入り，自ら発見した習慣を，自覚化された＜個の文化＞として取り出しつつ，それをわがこととして体得することを意味する。」とも述べている。

筆者が4．で述べた文化の体得とは，異文化を自分の中で消化すること，という定義になるが，細川の論と合わせて考えると，「文化体得」とは，学習者が自国を離れ，日本という異文化に接する中で出会う違和感，数知れない「なぜ？」の発見を，生活する中で自らが体験し，考え，自分の中に取り込んで，自分なりに理解し，認めた上で，自己のアイデンティティを失わずに生活していける状態，と言えるだろう。

学習者が，この「文化体得」をしていく支援ができるようなカリキュラムの提案が本稿の目的であるが，日本国内の日本語教育機関で「就学生」あるいは「留学生」として大学進学予備教育が受けられる期間は最長２年間である。学習者が日本に対して持つ「なぜ？」という問いが文化体得の始まりだ，とする細川の意見にうなずく一方，時間の制約がある中で「文化体得」の訓練を行うということになると，「なぜ？」の発見に関するすべてを学習者にゆだねるのは難しいと考える。初級レベルからの「文化」を意識したカリキュラムを考えた場合，ある程度は教師側から，その「なぜ？」を与えることもあるだろうし，カリキュラムの中に「なぜ？」を考えるきっかけ作りがなければならないだろう。

6．「日本文化」の捉え方

これまでの「文化」についての考察と，「文化体得」という考え方の下に，具体的なカリキュラムデザインの構築を行っていくわけだが，それに際して，日本文化をどう捉えるのか，その方法を明確にしたい。

6－1．日本の文化パターン

「文化」のカバーしているものがあまりにも広範囲にわたっており，また複雑に入り組んでいるため，その全てを網羅して「日本文化」を概観し，体系的に捉えることは難しい。そこで，日本文化を考える手がかりのひとつとしてSamovar他（1983）による文化パターンのカテゴリーを参考にしながら，それぞれの文化カテゴリーから考えられる授業のテーマ，あるいは授業の中で扱いたい日本文化を考える際のキーワードを考えることにした。カテゴリーは以下の６つである。

① 世界観　②活動指向　③時間指向
④人間性指向　⑤自己の知覚　⑥社会組織

6－2．アンケート調査

日本文化を考える授業のヒントを得ることを目的として，実際に日本で生活している就学生，留学生に対して日本で感じる「違和感」をアンケートで尋ねた。

①学生へのアンケート

日本へ来てから，どんな時に「違和感」を感じたか，を知るために，＜言語的＞＜社会的＞＜文化的＞側面からの日本への疑問を「なぜ…？」という疑問文を書いてもらう形で調査。⇒34名の学生からの回答を得た。すべて中国国籍の学生で，他の国籍の学生からの回答は得られなかった。

②教師へのアンケート

学習者に接してきた経験を基に，学生へのアンケートと同じく「なぜ…？」の疑問文を書いてもらう形で意見収集。⇒筆者の勤務していた日本語学校の常勤・非常勤講師14名からの回答を得た。

7．カリキュラムの提案

６－１．のSamovarらによる文化カテゴリーに，

筆者が考えるところの「日本文化」のキーワードを挿入したものと，6－2．のアンケート調査の結果に基づいて，日本語教育施設で大学進学予備教育を受ける就学生，留学生を対象（来日時にゼロ初級－日本語能力試験4級レベル）に，「文化体得」を念頭においたカリキュラムを提案したい。

学習期間：2年

学習目標：

①日本の大学入試に必要とされるアカデミック・ジャパニーズを獲得する。

②日本で生活していくにあたり，知識としての日本文化ではなく，能力としての日本文化を体得する。

レベル別目標：

＜初級＞6ヶ月（500時間）／日本語の基礎を身につけると共に，日常生活に困らない程度のコミュニケーション力をつける。

＜中級）6ヶ月（500時間）／初級で学んだことを言語的，文化的に再考し，文化的視点を育てると共に，日本語の運用能力をつける。

＜上級＞1年（1000時間）／日本という異文化の中で感じる違和感，数知れない「なぜ？」を振り返り，自分の在り方について考える。

具体的内容：

初級

来日して間もない頃は，ことばの問題はもちろん，新しい環境の下での生活が始まり，不安な気持ちが大きい。まず，日本語を使って話すことに対して恐怖感のないように進めていくことが大事だと考える。そのためには，例えば「自分の日本語が通じた！」という達成感を感じることが大切で，それが自信となり，必ず発話へつながっていく。さらに，教室の中で，なるべく多くのコミュニケーション場面を設定し，できればそれを学校の外で実践練習する機会を持てるようにしたい。そして，その実践の中で，うまくいった点，うまくいかなかった点などを自己反省し，教師からも気づきをフィードバックして，「話す」意欲，自信につなげたい。

◎取り入れたい文化的内容

a. 基本的なあいさつ→場面，あいさつを交わす相手によって，どのようにあいさつ言葉を使い分けるか。これは後の待遇表現にもつながるので，使い分けの概念を伝えていくことが肝要。

b. 体験学習として：スーパーの食品売り場へ行って，食品の種類，名称の確認／デパートへ行って，各階見学／チラシを使っていろいろなお店の紹介（どこでどんなものを売っているか）／買い物のしかた／町で見かける標識の意味／郵便局へ行って切手やはがきを実際に購入する練習／銀行でのお金のおろし方／レストランでの注文／実際にバス，電車などの公共交通機関を使って出かける→切符の買い方，路線図の見方，お金の払い方など／タクシーの乗り方／学校外の人を招いて話をする機会を作る／など。その他，学校所在地の沿革を学んだり，デパート等で催される日本各地あるいは学生の出身国に関わる催しは，学生の興味を惹くのではないだろうか。初級を半ば過ぎたら，これらの実際の経験を作文に書かせて，自分自身を振り返るきっかけを作るのもいい。

c. 縦書き，横書き両方可能な日本語：その表記システムならびに書き方の実践。

d.「はい」「いいえ」の答え方。特に英語圏からの学生は，英語と日本語では肯否のやりとりが違っているので注意。

中級

ずいぶん日本の生活にも慣れ，アルバイトも始めている時期である。学校外での交際範囲が広がり，学校外で日本語を使う機会も増えてくるし，生活が少し落ち着いたところで改めて生活の中での気づきがいろいろと出てくる時期ではないだろうか。初級のときには，体験学習を含め，文化面の学習に関してある程度教師の側から話題，課題を提供しなければならないところもあったが，中級からは，学習者の興味のあるものを対象に，授業の中で取り上げたりしながら「日本」について考えてみたい。

◎取り入れたい文化的内容

a. 敬語：初級の最後で学習する敬語については，なかなか定着せず，苦手意識を持つ学生が多い。しかし，敬語が上手く使えるかどうかで日本人の学習者に対する評価は大きく違ってくるので，場面に応じた敬語が使えるように指導したい。

b. 日本語に内包されている日本文化の側面について：学習項目としては，初級になるが，中級で改めてその文化的側面に触れられるといいのではないか。大きく以下の5点について，日本語の特色を言葉といっしょに考える機会を持ちたい。さらに，教室の中で，それぞれの場面設定のもと，学習者が自分で使ってみる練習ができればいい。

①こそあど→初級で学習した，現場指示の体系に加えて，文脈指示の体系の習得。

②授受表現→受給の主体や相手に対する話し手の待遇意識が加わって，相手と自分との人間関係が表出する。受給表現によって，話し手の心の

肉付けがされること。

③受身表現→人間中心であり，迷惑感情が先にたつ「迷惑受身」となる。

④「内」「外」の関係がもたらす表現上の特色→敬語を含めて，場面や文体，語感を考慮した上で使う語彙が選ばれる。

⑤「私」の立場で事をとらえ，言葉を選ぶ姿勢→多様な一人称，感情形容詞の用法等

c.ことわざや慣用句：日本のものと学習者の出身国のものとの比較。

d. 擬音語，擬態語：学習者が興味を持ち，おもしろがって取り組む分野。

e. 街でカタカナを拾ってこよう！：新聞の折り込み広告の中，また実際に街に出て，看板や表示などに使われているカタカナを拾ってみる。

f.カラオケ：音楽が好きな学生であれば，歌から日本語を覚えるのもいい。

上級

日常生活にはほとんど困ることなく生活できている時期である。語彙もかなり増え，ある程度の会話力がついていることを想定すると，上級では様々な授業の可能性が考えられる。

以下，記すのは，あくまでも授業の際のヒント（日本文化のどういった面について教師，学生が共に考えることができるだろうか，どういった面を考えれば「文化体得」に近付けるだろうか，というヒント）になれば，という意味で提案するものである。

◎言語的側面

・婉曲表現：どんな表現を婉曲的と考えるか，またそれを使う日本人の心理，文化背景
・男性，女性の言葉遣い
・家族の呼称，職場内での呼び方：文化がどう反映されているか
・学習者の母語に翻訳しにくい，または翻訳できない日本語は何か。また，その理由
・日本人の非言語メッセージ
・言葉のニュアンス：類義語の使い分け
・接頭辞＆接尾辞
・話し言葉＆書き言葉
・流行語
・方言：アルバイト先などで聞く日本語と学校で習った日本語の違い
・前置き＆あいづち：日常のコミュニケーションの中での円滑油になっていることば

◎社会的側面

・日本の地理・歴史：日本の歩み，歴史が作った価値観など
・男女の役割：女性の社会進出に伴う変化と影響
・日本の会社：会社組織，日本式経営，上下関係，ストレス，公私の区別，頭脳流出
・教育・学校：教育システム，制服，勉強しない大学生，学級崩壊，少年犯罪，受験戦争
・日本社会：日本国憲法，政治，自動販売機，老齢化，性に関する情報，守るべき礼儀

◎文化的側面

・衣食住：和服，服装，食事のマナー，和菓子，インスタントラーメン，和洋折衷，畳，障子
・精神：神道，儒教や仏教の教え，縁起をかつぐ，忠臣蔵，天皇，プライバシー（電車の車内放送，女性トイレの消音システムなど），清潔好き（様々な抗菌グッズ），親へのすねかじり，宗教観，マニュアル好きな日本人
・自然：季節感，季節の風物詩，祭り，桜，富士山
・伝統・習慣：茶道，華道，歌舞伎，伝統芸能，職人気質，職人技
・レジャー：パチンコ，温泉，漫画，ファミコン，ブランド志向の若者，カラオケ，お土産，芸能（アイドル歌手など）

上記のような話題に関して，実際に場所を訪問してみる，関係者を学校に招いて話を聞く，学習者が自分で調べてリポートする，などの体験学習につなげられれば効果があると考える。視聴覚教材を使用することも可能であるし，話題に関する新聞記事，雑誌記事，本などに触れるのもいい。これらをすべて網羅して学習することは難しいが，教師の側で話題の引き出しを多く持っていることは，授業の幅を広げられるという点で必要なことである。学習者だけではなく，教師も日頃から生活の中での気づきを高め，授業のヒントを集めておくことが大切だろう。

8．考　察

本稿で考えた「文化体得」のためのカリキュラムは，日本はこんな国で，日本人はこういう考え方をする人たちなのだ，ということを教えるためのものではなく，5．で考えたように，あくまでも学習者主体で，学習者が自分自身の眼で見た日本に対する気づきを出発点にするものである。その気づきには，学習者の自文化からの観点による誤解や偏見，思い込みや先入観もあるだろう。逆に，100人の日本人がいれば，100通りの日本文化に対する感じ方，考え方があっていいはずで，筆者という一個人の日本文化観，これまでの授業を通しての体験から得た考えもかなり入っている

7．のカリキュラムには，同じように思い込みや偏見があるだろう。

しかし，授業の中で共に考え，議論していく中で，教師と学習者お互いが，お互いの文化の中で培ってきた偏見や思い込みから解放され，日本文化を改めて捉え直すことができれば，という考えである。学習者に対して単に授業の中で日本語を教え，異文化に接触する機会を与えるというのではなく，カリキュラム全体として学習者の気づきを高めたり，その気づきに対する適切な解釈，仮説を引き出し，共に考えられるような，前後の指導のあり方を含めた授業のヒント，提案であることを最後に改めて確認しておきたい。

9．おわりに

戦後アメリカへ留学した人たちについて考察した阿川（2001）の中に江藤　淳の紹介がある。江藤は当初，２年やそこら外国に住んだくらいで，生まれたときから続けてきた暮らし方が変わってしまうわけはないと考え，むしろ自分は変えまいと努力したようだが，彼が2年間のアメリカ生活をまとめた『アメリカと私』の中で，「異質の文化の中で，自分の同一性（アイデンティティ）を保とうとすれば，必ず異質の手続きが必要になる。その手続きが，おそらく私の何かを微妙に，しかしかなり確実に変えた。」と述べているそうだ。この江藤のことばが，まさに「異文化体得」の過程を経たことばではないだろうか。

日本語教育施設で日本語を学ぶ学生が，日本という異文化を体得するため（江藤が言うところの「異質の手続き」をするため）の手がかり，手助けとして，本稿が少しでも役に立てば幸いである。

【参考文献】

(1) 青木　保（2001）『異文化理解』（岩波書店）

(2) 阿川尚之（2001）『アメリカが見つかりましたか－戦後篇－』（都市出版）

(3) 川上郁雄（2001）「言語と文化の教育そして日本事情」『2001年日本語教育学会秋季大会予稿集』p. 27-31

(4) Samovar他（1983）『異文化間コミュニケーション入門』（聖文社）

(5) 長尾　真（2001）『「わかる」とは何か』（岩波書店）

(6) 鍋倉健悦（1997）『異文化間コミュニケーション入門』（丸善ライブラリー）

(7) 細川英雄（1999）『日本語教育と日本事情－異文化を超える－』（明石書店）